

北島三郎を育てた、「人との出会い」と「学びの心」

1954年、17歳で高校を中退後、東京の親族を頼って18歳の時に上京し、当初は東京声専音楽学校 (1989年、昭和音楽芸術学院に改称。2007年閉校)に入学。
しかし歌謡曲志向であった為、渋谷を拠点に流しの仕事をしながらデビューを目指す。

1960年、流しの収入は3曲100円だったが、ある日羽振りの良い客が1000円を出してくれた。礼を言い1曲歌うと翌日に新橋の喫茶店に呼び出された。その相手は北島の評判を聞きつけた日本コロムビアの芸能部長で、この時、喫茶店で引き合わされたのが作曲家、船村徹だった。この時の事を振り返り北島は「こういうちょっとした出会いなんだけど、僅かな出会いが人生で物凄い出会いになってくる」と語っている。
これを契機に船村門下生となり、レッスンの日々となる。門下生になり月謝5000円を支払っていた(昭和30年代の5000円は大金、昭和 年)の国家公務員 高卒初任給が)

1961年、ある日のレッスン前、船村から「今日から他の歌はいいからこの歌を歌え、この歌を勉強しろ。」と譜面を渡される。これが後に最初のヒット曲となった『なみだ船』だった。

この年には既にレコーディングも行われ、その場で船村から紹介されたのが新栄プロダクションの社長、西川幸男だった。

また、この年にはギター漫才『ゲルピンちゃん太ぼん太』の“ぼん太”として漫才コンビでのステージも経験している。これは歌の師匠である船村が中々デビューのチャンスを得られない北島にステージ度胸を付けさせる為、自ら台本を書き、もう1人の弟子とコンビを組ませ、知り合いの興行師に頼み込んで仕込んだ事で、東北地方の1か月興行の前座芸人として機会を与えられた。しかし、3日ほどで「使い物にならない」と帰され、ギャラは一切貰えなかった。

ロカビリー全盛のこの頃、正統派の演歌・歌謡曲の新人は中々需要が無く、船村自身「あんなに(売り込みに)苦労した弟子は他には居なかった。」と述べている。

1962年、新栄プロの先輩歌手、村田英雄の「王将」のヒット記念パーティーで歌手としての初舞台を踏む。この年の3月には“呼びやすさ・親しみやすさ先行”で「北海道(北の島)生まれの三郎」という由来のもとに北島三郎と命名、デビューが決定する。

ただ、当時の芸能界で、「既婚の新人歌手」は有り得なかった為、プロフィール上は独身とした。
以上、以下ウィキペディアより

2021年2月2日のNHKラジオ、明日への言葉のインタビューでは、次のように述べている。

素人が自分の歌を歌っているのを聞くと、「感動するように歌う人がいる」それをこっそりいただき、自分のものにする。
アマチュアから学ぶ心が大切!と言っている。

北島 三郎(きたじま さぶろう、1936年(昭和11年)10月4日 -)は、日本の演歌歌手、俳優、作詞家、作曲家。
作曲家・船村徹門下出身



『函館の女』に始まる「女」シリーズ、『兄弟仁義』などの「任侠」シリーズなど、数多くのヒット曲がある。一般にはサブちゃんという愛称で呼ばれている。原譲二(はらじょうじ)のペンネームでも知られ、自身の楽曲の作詞・作曲ばかりでなく、自身の舞台のシナリオ・演出や、北島ファミリーはじめ、他の演歌歌手への楽曲提供など、マルチな活動を精力的に行っている。
作曲家・船村徹門下出身で、門下生で作る「船村徹同門会」(会長・鳥羽一郎)では名誉相談役を務める。

来歴 デビューまで

北海道上磯郡知内村(現:知内町)出身。北海道函館西高等学校に進学した。高校時代の北島は、海で溺れた小学生を救助したという逸話がある(この人命救助の件は当時の『函館新聞』にも掲載され、その記事が函館市の北島三郎記念館に飾られている)。高校在学中に函館で開催された「NHKのど自慢」に出場する。この時、鐘は2つだったが、司会の宮田輝から「良い声して学生さんですか? お上手でしたのねえ...」と優しく声をかけられたことで、「歌やれば歌手の道あるかな?」と思うようになり、結局それが歌手への目覚めの第一歩になったという。

1954年、18歳で高校を卒業後、東京の親族を頼って上京し、当初は東京声専音楽学校(1989年、昭和音楽芸術学院に改称、2007年閉校)に入学。しかし歌謡曲志向であったため、渋谷を拠点に流しの仕事をしながらデビューを目指す。この頃に北島が当時都内で下宿していたアパートの大家の娘であった雅子(後の北島音楽事務所社長 副会長)と結婚。1959年11月30日、挙式。北島がレコードデビューする約3年前の挙式だった。式に出席したのは両家あわせて21人だけだ...